

青森県における公共図書館数の変化とその経緯

Change in the number of public libraries and their background in Aomori Prefecture

田 嶋 知 宏

Chihiro TAJIMA

青森中央短期大学食物栄養学科

Department of food dietetics, Aomori Chuo Junior College

Key words ; 公共図書館 (青森県)、青森県図書館史、簡易図書館、献本運動

要旨 (要約)

青森県では、公共図書館の前身となった八戸書籍縦覧所に代表されるような全国的にみて早い時期から図書館の設置が始まった。図書館が設置され、増加した背景にはその要因となる経緯が存在する。本稿は青森県内の公共図書館数の変化を踏まえたうえで、増加が顕著にみられた経緯を明らかにしようとした。まず、青森県内の公共図書館数のグラフ化したところ、顕著な増加がみられる時期が4つ確認された。そのうえで、把握された4つの時期に新設された図書館の設置経緯を分析した。その結果として、明治期は既存蔵書の活用、有志による読書活動、通俗教育を目的として設置が始まった点、大正期は青森県の補助金政策によって一時的な図書館数の急増をみるものの、戦時体制下で激減した点、戦後は献本運動などを通して図書館を求める声があっても、厳しい財政により公民館図書室で代替する自治体が多く、国の補助金や重点事業として予算配分され、図書館数が増加した点が確認された。

1. はじめに

公共図書館の未設置自治体において住民アンケートにより、求める公共施設として上位を占めるものとして公共図書館があげられる。今日、公共図書館の必要性や存在意義は一般の人々に理解されているといえる。しかし、こうした理解は図書館が設置された当初から存在したものとは考えにくく、公共図書館の必要性が認められ、求められるようになった経緯を明らかにすることは、公共図書館がどのような役割を人々から期待されてきたのかを示すことへとつながると考えられる。

図書館の設置経緯を明らかにする研究として、公共図書館以外の学校図書館¹もしくは個別図書館の設置背景や経緯を扱ったもの²は存在するが、特定地域に絞った研究は、管見の限り存在していな

い。以上を踏まえつつ、本稿では青森県という特定地域の公共図書館数の変化に着目し、公共図書館が増加した経緯を明らかにすることを目的として、青森県内の公共図書館の創設について書かれた報告書、新聞記事、各自治体で発行される地方史などの文献等を用いて分析を行った。公共図書館の状況を具体的に把握する方法として、数値以外にどのような活動に取り組んできたのかを示した青森県の公共図書館に関する歴史研究の成果を活用することができる。青森県の公共図書館に関する歴史研究は、県内を網羅的に取り扱ったものに『青森県図書館運動史』、『青森県読書運動明治大正史』、『青森県立図書館史』、『近代日本図書館の歩み：地方篇』所収の「青森県」がある。また、『青森県立図書館四十年の歩み』や『弘前図書館60年の歩み』のように個別の各図書館史として刊行されたものもある。しかし、1978年刊行の『青森県立図書館史』を中心として、具体的な活動を示す記述はみられるものの、いずれの研究や資料も刊行から10年以上経過しており、現在に至る青森県内の公共図書館の状況を経年的に扱った研究は管見の限り存在していない。

本稿において、青森県の公共図書館数の傾向や特徴を確認することで、現在の青森県の公共図書館がおかれた状況に至る要因を解明することに繋げることができる。そして、その要因を踏まえることで、青森県の公共図書館のこれからの活動に必要な視点を提示することが可能となる。

2. 青森県における公共図書館数の変化

ここでは、明治期から現在までの青森県における公共図書館数の変化を確認する（図1、図2）³。青森県において、近代公共図書館が成立したのは、日本に欧米の図書館制度が紹介された明治初期であった。1874年に八戸書籍縦覧所、1875年に弘前の東奥義塾の博覧書院など、図書館の開設がみられた。八戸書籍縦覧所や博覧書院は、一般にも公開された施設であった。これらの動きを青森県の図書館運動史をまとめた間山は、公共図書館の源流と指摘した⁴。

青森県では、明治初期に図書館の源流を求めることができるものの、県内の公共図書館数が1920年代になるまで増加しなかった。1920年代に入ると町村及び私立の公共図書館が急激に増加した。1930年代に入ると一度急激な減少がみられるものの、一定数を維持した。

1940年代、戦時体制下に入っても県立図書館、弘前市立弘前図書館、八戸市立図書館は維持されたものの、町村図書館及び私立の公共図書館の機能は停止した。そのため終戦後の1946年に町村図書館及び私立図書館は図書館数上に表れなくなった⁵。数値上表れた図書館であっても、県立図書館の火災や占領軍による八戸市立図書館の接収など、図書館活動の環境は厳しかったと考えられる。

その後、活動の再開や図書館の新設によって1952年には6館の町村図書館が確認できるようになった。三本木町では市制（1954年）や合併（1955年）に伴い、町立図書館から市立図書館への移行や吸収によって、市立図書館数の増加と町村図書館数の減少に影響をあたえた。

1960年代から1970年代初頭にかけては緩やかに町村図書館の増加がみられた。1975年から1983年⁶及び1995年から1999年にかけて県内の町村図書館は急激に増加した。このとき増加した町村図書館は、公民館図書室から転換したもので、公民館図書室数の減少に表れている（図3）。

2004年から2006年にかけて町村図書館数は減少傾向にあった。この背景には、平成の市町村合併により、複数の町村図書館が市制に伴い、市立図書館への移行や吸収された影響があった。なお、私立の公共図書館は戦後、図書館法の制定による制度変更の影響もあって統計上ゼロの状態が今日まで続

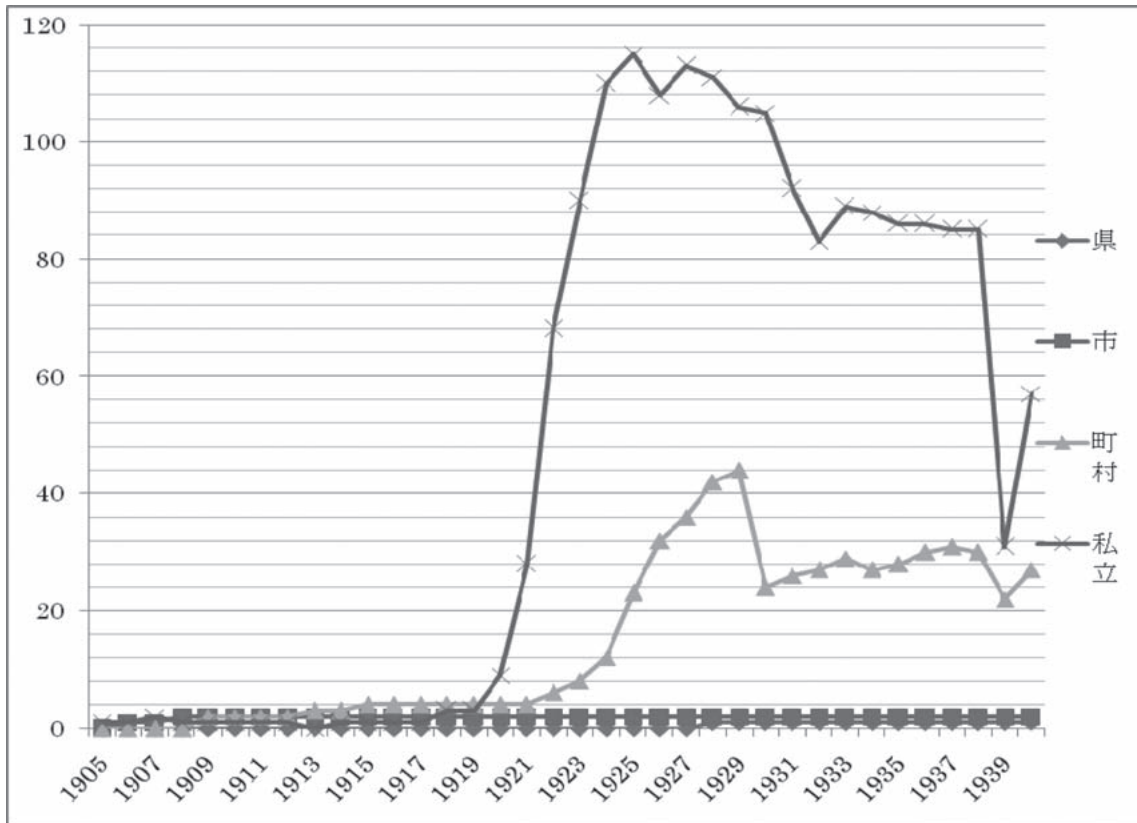


図.1 青森県の公共図書館数の変化1905年から1939年

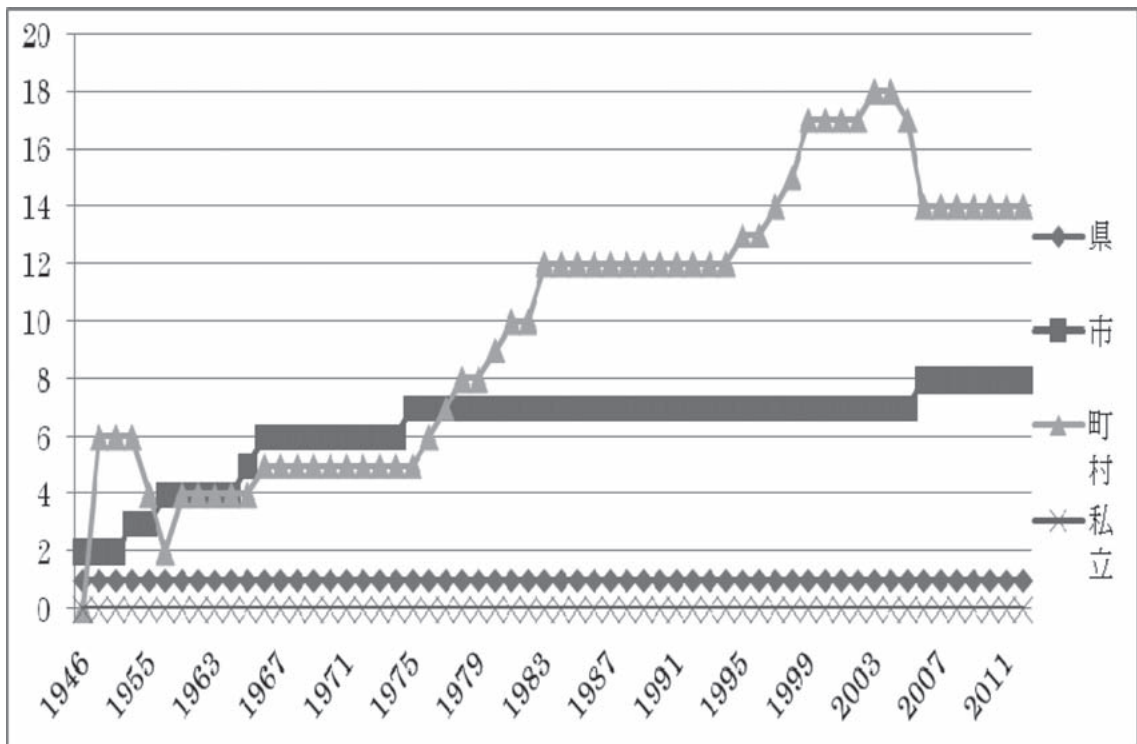


図.2 青森県の公共図書館数の変化1946年から2012年

いている。

以上の公共図書館数の変化を踏まえて、次章以降では①1870年代から1900年頃の青森県における公

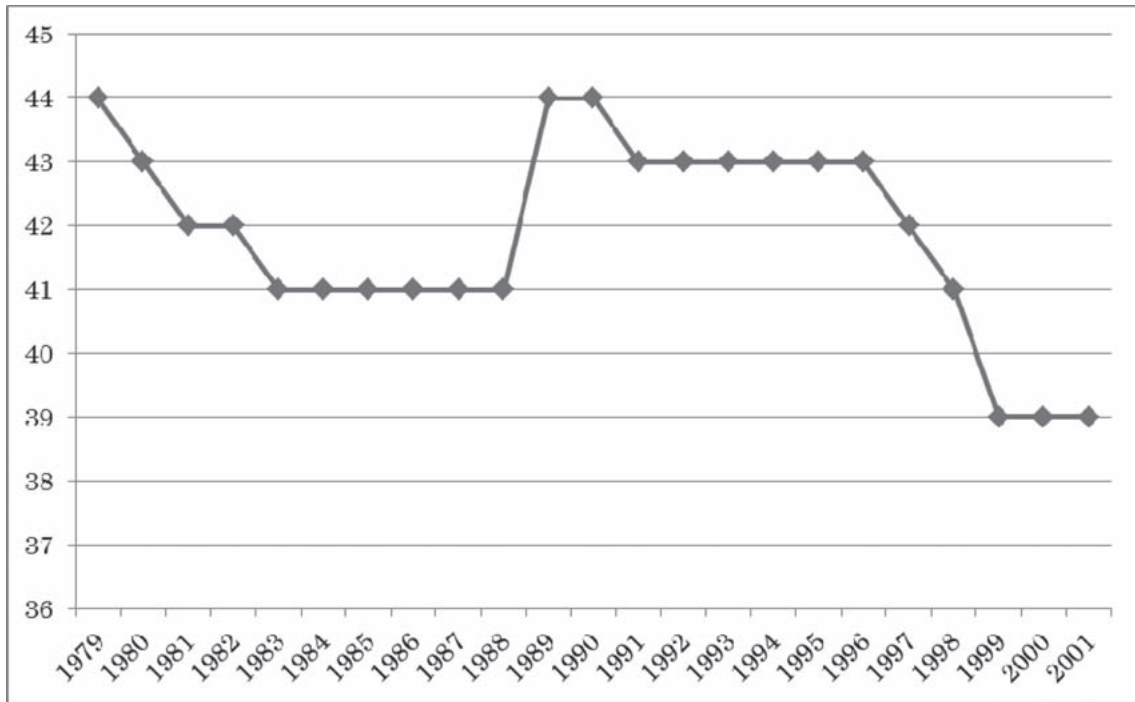


図 .3青森県内の公民館図書館数1979年から2001年

共図書館の設置期、②1920年代の町村及び私立図書館の急激な増加期、③1970年代初頭から1983年の市立図書館の充実及び町村図書館の急増期、④1995年から1999年にかけての町村図書館微増期の4つの時期に焦点あて、公共図書館の設置経緯を取り上げる。

3. 1870年代から1900年頃の青森県における公共図書館の設置期

近代公共図書館制度は、義務教育を終えたものに対する継続的な教育を行う施設として1850年代のイギリスやアメリカで確立された。明治初期、英米から図書館制度が日本に紹介された。しかし、明治初期に青森県で創られた図書館施設は成人教育目的に設置された公共図書館と一線を画した存在であった。

3.1. 蔵書活用を目的にした図書館施設

明治初期、青森県の図書館はすでに集積されていた蔵書を活用しようとする動きから始まった。八戸では1874年、南部栄信が旧藩時代の図書を一般開放することを決めて、旧藩の武士の「弘観舎」を八戸書籍縦覧所とし、広く住民の利用に供された⁷。

弘前では1892年、東奥義塾の教師であった外崎覚らが中心となって津軽古図書保存会を立ち上げ、地域に残された古文書や図書を収集し、東奥義塾内に閲覧所を設けた。現在、弘前市立図書館には収集した資料が引き継がれている。1902年私立弘前教育会が中心となって、図書館設置運動をはじめた。翌1903年には読書団体などから寄贈された図書をもとに、「私立弘前図書館」を設立した。1906年5月には、私立弘前図書館の蔵書と新築の建物が市に寄付され、弘前市立図書館が開館した⁸。

青森では1899年有志団体、青年倶楽部が図書部をおき、住民に公開された。1902年には手狭になっ

たため移転し、私立青森図書館に衣替えした。1907年、私立青森図書館は解散のうえ、市に寄贈移管された⁹。それに伴い、私立青森図書館の蔵書をもとに青森市立図書館として開館した。

こうした県内の動きは、既に集められていた蔵書をさらに活用する目的で図書館が創られたことを意味していた。

3.2. 有志による図書館施設

青森県では、既存の蔵書にとらわれず、有志がみずからの目的に即して図書や資金を出し合い図書館を創る動きもみられた。1880年、三戸には「三十三人の町の有志が相図り、図書を購入して「書籍縦覧所」を設置し、これが基盤になって三戸書籍館が」¹⁰、旧三戸代官所の一戸正綱を館長として開設された。有志が図書や資金を拠出し集めた蔵書は、洋書92冊を含む、約1,230冊であった¹¹。1892年に三戸尋常高等小学校が37円でこれらの蔵書を払い受け、三戸書籍館は、廃止された¹²。三戸に書籍縦覧所が設置されたのと同じ、1880年五戸にも、旧斗南半家老内藤信節を館長とする五戸書籍館が開設された。活動の記録が残されていないため不祥であるものの、三戸と同様の活動を行っていたと推定される。三戸書籍館のような有志の拠出を基盤とした施設は、有志が欠けるなどして運営費の確保が難しくなり、閉鎖へとつながった。

3.3. 学校の中の公共図書館

学校教育制度の普及に伴って、就学する子どもの親を教育することを意図し始められたのが通俗教育であった¹³。青森県でも、小学校で通俗教育が広く取り組まれた。1907年、現在の田舎館村に存在した東光寺尋常小学校において、児童の就学率・出席率向上と風紀矯正を目的とする「東光寺尋常小学校児童保護会」が創設された。その活動の一環に「図書館を設置し一般の縦覧に供すること」が挙げられていた¹⁴。東光寺尋常小学校児童保護会による図書館活動はまさに通俗教育といってよいものである。

1909年4月、十和田市民図書館につながる図書館が開館した。同図書館は「当時の皇太子（大正天皇）が東北をご旅行されたのを記念して三本木小学校内に蔵書三百冊で開設された」¹⁵三本木村立図書館であった。「毎年百円以上の町費を支出、主として通俗教育に資せんとして其の蔵書は専ら簡易普通の主義をとりて備付あり」とされるように通俗教育を目的にしたものであった¹⁶。

1909年、上北郡新町尋常高等小学校訓導の中村連城を館長とする野辺地町立野辺地図書館が開館し、1915年11月、七戸町立図書館が「七戸尋常高等小学校の中に開設され」¹⁷ ¹⁸るなど、県内の小学校内に通俗教育を目的に据えた数百冊の蔵書をもつ簡易的な図書館が設置された。校長を館長に、書記を教職員が兼務する、貸し出し中心の図書館であった¹⁹。

4. 1920年代の町村及び私立図書館の急激な増加期

1910年代後半、全国で学校外の教育制度としての社会教育制度が整えられると、青森県においても社会教育主事の職をおき、図書館を含む社会教育行政に従事することになった。それによって、通俗教育から社会教育への転換がなされ、成人に対する教育を目的とする図書館整備が進められた。

4.1. 県の簡易図書館の設置奨励政策

1920年10月、青森県で社会教育主事が置かれた直後に、社会教育を目的とする図書館施設の設置を促す「簡易図書館設置奨励補助規程」が教育に関する勅語渙発30年を記念する名目のもとで設けられた。「簡易図書館設置奨励補助規程」(図4)は簡易図書館を新設する場合に1箇所20円の補助をすることになった。

同規程は「農村青年の教育の普及を図るべく」という目的をもち、「義務教育の終わった者の補習教育の一助として小規模ながら再適切な書籍のみを備付け、場所は学校の一部を宛る」まさしく簡易な図書館の設置を促すものであった²⁰。通俗教育に位置づけられた図書館とは期待される目的が異なっていた。この県による補助金政策が契機となって1925年には青森県内の図書館が140館まで増加した。

簡易図書館設置奨励補助規程(青森県令第85号)大正9年10月30日
第1条 町村又は施設団体に於て新に簡易図書館を設置したるときは毎年予算を以て定むる金額範囲内に於て補助金を交付す前項の補助金は図書購入費に充つるものとす
第2条 前条に依り補助を受けんとするときはその管理者に於て左記各号を具し郡市役所を経由申請すべし
1 名称
2 位置
3 設置年月日
4 規則
5 当該年度経費予算
6 維持方法
第3条 補助を受けたる図書館の管理者は年度経過後二ヶ月以内に左記事項を調査し郡市役所を経由報告すべし
1 前年度経費決算
2 前年度開館日数閲覧図書冊数
第4条 補助を受けたる図書館の管理に於て本規程の趣旨に違反したる時は既に交付したる金額の全部又は一部の返納を命ずる事あるべし
第5条 町村又は私設団体において新たに巡回文庫を設置したる場合に在りても本規程を準ず

図.4簡易図書館設置奨励補助規程

1922年には藤崎村立簡易図書館が役場内に開設され、年間100円の資料費を予算化した。年間の利用者は当初の290人から1929年に約480人へと増加した。しかし、その後利用者の減少にともなって1940年には休館に至ることになった²¹。

1923年に富木館村(現在の藤崎町)では簡易図書館を育英小学校内に開設し、担当教員も置かれた。開館当初は年間268日開館、閲覧者460人であった。しかし、1927年には年間80日開館、閲覧者80人に減少した²²。油川町(現在の青森市)では、「青年の知識向上」²³を目的として町内から寄付を募って1926年5月21日町立図書館を開設した。

補助金交付を掲げた補助規程は親に対する通俗教育とは異なる目的であったものの、大半の設置場が通俗教育目的の図書館と同じく、小学校内であった。この補助規程は、継続的な補助を内容とし

ていなかった。そのために、小学校という安定した場所を確保したものの運営費用に乏しい簡易図書館は開館休業状態になるものも多かった。

1926年、県令15号によって簡易図書館設置奨励補助規程は、廃止された。この規定に代わって「図書館施設要項並準則」が定められたものの、従前のような図書館設置につながる補助規程を欠いたために財政基盤の弱い図書館の閉鎖を招き、図書館数の減少につながった。

5. 1970年代初頭から1983年の市立図書館の充実及び町村図書館の急増期

戦後、社会教育法（1949年）の施行にもとまって、整備された公民館施設内に図書室が設置され、公共図書館の代替となった。例えば、1953年8月開館の大畑公民館には700冊の図書が置かれた²⁴。1954年4月、大三沢町公民館では購入図書200冊と献本図書200冊あわせて400冊の蔵書で図書室を設置した。1958年、同図書室は看板を掛け替え三沢市立図書館となった。県内各地公民館併設図書館は狭隘と混雑から、独立した館舎を望む声が出された。

しかし、小泊村では、国庫補助を2年受けてようやく公民館が整備できる状態であった。同村は「小泊村社会教育方針と計画（1969年）」に社会教育施設設備の整備として、図書の充実を挙げるたが、独立した図書館施設の整備の余裕までなかった²⁵。後述するように独立した図書館を望む声はあるものの、予算の確保が難しく実現しない市町村も多かった。

5.1. 献本運動による公共図書館の充実

青森県内において、図書館への献本行為自体は明治初期からみられた。当初は有力者や篤志家による献本が主流であったが、やがて住民中心の献本運動が行われるようになった。例えば、1940年に十和田村で村外中学校へ通う学生が図書館を求め、献本運動と資金を出し合い新刊書を購入した活動があった²⁶。献本で集められた図書は奥入瀬簡易図書館として地元民に公開され、1948年村に移管され、村立図書館となる基盤となった。

また、十和田市でも献本運動が顕著にみられた。1956年十和田市では、市町村合併に伴い十和田市立図書館と改称したものの、小学校に間借りの状態であった²⁷。1966年に十和田市立図書館はようやく十和田市社会福祉会館2階に移転した。しかし、「あちこちの間借りで“名ばかり”の時代が続」²⁸いたことで、「市民の間に『図書館を』という声は次第に高まり」²⁹、1973年の新館建設につながった。

新館建設に向けて1971年から市民による献本運動が展開され、3,430冊（1973年度末）が寄贈された。この他にも、献本募金も行われ、約182万円（1973年末）が寄付された。こうした市民による図書館支援活動を示すため、新館開館に際し、十和田市立図書館を十和田市民図書館へと改称した。その後も、市民1人あたり、1冊の蔵書を目指して、献本運動が継続された。その結果、1979年に市民1人あたり、1冊となる蔵書57,000冊を達成した。後述するように、献本運動は県内の多くの図書館で取り組まれた。

5.2. 市町村立図書館の急増と献本運動

青森県では、1975年に5館であった町村図書館が1983年までに12館へと倍以上に増加した。7つ町で新たに図書館が設置された。この時期、設置された町では公民館図書室を設けているところが多

かったものの、蔵書数の少なさや閲覧・学習場所の狭さなどが課題となり、独立した図書館を望む声につながった。

例えば、三戸町では「町民図書館建設は、町民永年の夢だった」³⁰とされる。1978年に就任した町長が公約のひとつとして掲げていた³¹ことで、設置計画が進み、文部省の補助金で資金のめどを付けることができたため実現した³²。三戸町でも図書館建設に際して、町による町民献本運動が展開され、1981年開館に至った。

六戸町では1977年、役場及び就業改善センターの一角に図書館類似施設を設置したところ「町民の間から独立した図書館の建設を望む声が高まり、建設の運びとなった」³³という。厳しい財政下で、重点的に予算が配分され町の単独事業として実現された³⁴。六戸町でも図書館建設に際して、教育委員会主導による町民献本運動で約500冊が寄せられ、1983年開館に至った³⁵。開館後も献本運動が続けられ、住民も協力したことが当時の新聞で報じられた³⁶。

平賀町では、1976年から「中央公民館に本を贈りましょう」のキャッチフレーズのもと、献本運動が展開され蔵書2万冊を超える公民館図書室ができていた³⁷。30を超える読書会が組織され、図書館の充実を求める声も出された。そうした中で、1980年県立柏木農業高校が移転するに伴い、同校の図書館を県から払い下げを受けて町民図書館として開館させた。

1975年から1983年にかけて、県内の町立図書館急増には、図書館施設を求める声に財政的な裏付けの目途か代替手段（建物）の確保が実現した背景があった。また、献本運動が広まることで、図書館設置を求める機運をさらに高めることにもつながった。

しかし、1983年以降、図書館の設置について「各自治体とも財政上の問題が絡み、緊急性が低いことからどうしても事業の優先順位では下位とならざるを得ず」³⁸と財政的な目途のつかない市町村も存在し、1995年の田子町立図書館開館まで10年以上新たな図書館の設置が行われなかった。

6. 1995年から1999年にかけての町村図書館微増期

1995年から1999年にかけて5つの町村図書館が新たに整備された。1997年4月、六ヶ所村民図書館は文化交流プラザ「スワニー」に併設された施設であった³⁹。1998年4月、五戸町では町中心部の「歴史みらいパーク」に復元した代官所とともに、図書館が整備された⁴⁰。この時期開館した町村図書館は複合施設として設置されたものが多い。これは、限られた予算で複数の施設を建設することで財政的な目途を付けようとする意図があったと考えられる。この時期になると図書館の設置に伴う献本運動は顕著にみられなくなった。

7. 結論

本研究では、本稿では青森県という特定地域において、公共図書館数の変化を確認したうえで、公共図書館が増加した背景を明らかにするために、青森県内の公共図書館の創設について書かれた報告書、新聞記事、文献等を用いて分析検討した。

その結果、青森県において公共図書館の顕著な増加は、①1870年代から1900年頃の青森県における公共図書館の設置期、②1920年代の町村及び私立図書館の急激な増加期、③1970年代初頭から1983年の市立図書館の充実及び町村図書館の急増期、④1995年から1999年にかけての町村図書館微増期の4

つの時期と確認された。

①の時期の設置経緯は多様で既存蔵書の活用、有志による読書活動、通俗教育を目的に据えていたと確認された。②の時期の設置経緯は、通俗教育によって図書館を設ける土壌ができつつあったなかで、青森県の補助金政策に促され、図書館数の急増につながったと確認された。しかし、運営資金を欠き、戦時体制下で不要不急とされた図書館数は激減した。③及び④の時期の設置経緯は、公民館図書室の狭隘と混雑、また献本運動などを通して独立した図書館を求める声が出されたことで、国の補助金や重点事業として配分された予算で、資金のめどをつけて図書館の設置をはかったと確認された。なお、資金のめどのつかない市町村では、図書館を求める声が出されているものの、市立図書館の設置に至っていない⁴¹。

青森県において公共図書館の数が増加する背景には時期ごとに異なる経緯があると確認できた。今後は、個別の事例に基づき、設置経緯を検討し、公共図書館に期待された役割を明らかにしていきたい。

参考・引用文献

¹ 野口武悟, 米田宏樹. わが国の聾学校における学校図書館の導入とその背景: 1920年代~1950年代を中心に. 心身障害学研究. 2005, 29, p.35-49.

² 吉田昭子. 東京市立日比谷図書館構想と設立経過: 論議から開館まで. Library and information science. 2010, (64), p.135-175.

坂内夏子. 児童図書館設立の背景: 戦前東京市立図書館児童室に焦点をあてて. 早稲田大学教育学部学術研究(教育・生涯教育学・初等教育学編). 2011, (59), p.15-33.

³ 図書館数について、1946年までは『文部省年報』、『青森県学事年報』、『青森県統計書』、『青森県治一斑』、『青森県勢概要』、『青森県学事要覧』、『図書館一覧(文部省社会教育局)』、『青森県勢要覧』、『東奥年鑑』の各年版で数値を確認し、1953年以降は『日本の図書館』の各年版、1969年以降は『青森県の図書館』の各年版で数値を確認した。数値の確認できない期間があったため、複数の情報源を組み合わせた。

⁴ 間山洋八 著『青森県図書館運動史』津軽書房, 1967, 263p.

⁵ 文部省社会教育局『図書館一覧: 昭和二十一年五月一日現在』p.5, 8, 12, 17.

⁶ この時期は、図書館の増加だけでなく、三沢市立図書館や野辺地町立図書館などの既存の図書館で新館建設がみられた。

⁷ 八戸市立図書館百年史編集委員会 編『八戸市立図書館百年史』八戸市立図書館, 1974, 594p.

⁸ 『弘前図書館六十年の歩み』弘前図書館, 1966, 152p.

⁹ 私立青森図書館『第七期事務会計報告及本館解散顛末報告: 附沿革一覧』1907, 28p.

¹⁰ 内沢義宜「公共図書館の役割と充実」デーリー東北, 1981年6月8日

¹¹ 三戸町史編集委員会『三戸町史: 下巻』三戸町, 1997, p.77

¹² 三戸小学校百年誌編纂委員会『三戸小学校百年誌』三戸小学校創立百周年記念事業協会, 1974, p.17, 962.

¹³ 松田武雄『近代日本社会教育の成立』九州大学出版会, 2004, 373p.

¹⁴ 『南津軽郡是』(縮刷復刻版), 名著出版, 1975, 788p.

¹⁵ 「実を結んだ献本運動: 十和田市」東奥日報, 1979年2月8日

¹⁶ 十和田市史編纂委員会『十和田市史: 上巻』十和田市, 1976, p.826

¹⁷ 「図書館が広くなりました: 七戸」デーリー東北, 1987年12月30日

¹⁸ 七戸町教育委員会編『七戸中央公民館・七戸町立図書館の歩み: 建築25周年記念』1988, 41p.

¹⁹ 七戸町史刊行委員会『七戸町史』七戸町, 1986, p.652-653.

- ²⁰『東奥日報』大正9年11月30日
- ²¹藤崎町誌編さん委員会『藤崎町誌：第2巻』藤崎町,1996,p.400-401.
- ²²常盤村村史編纂委員会『常盤村村史：通史編Ⅰ』常盤村,2003,p.696.
- ²³西田源蔵『油川町誌』（復刻版）,油川町・青森市合併五十周年記念事業協賛会,1989,p.112.
- ²⁴工藤睦男『大畑町史』大畑町1992,p.456-459.
- ²⁵小泊村史編纂委員会『小泊村史：下巻』小泊村,1998,p.328-335.
- ²⁶中道等『十和田村史：下巻』十和田村役場,1955,p.594-595.
- ²⁷十和田市史編纂委員会『十和田市史：上巻』十和田市,1976, p.828.
- ²⁸「文庫本ボンと六百二十冊」東奥日報,1980年2月22日
- ²⁹「実を結んだ献本運動：十和田市」東奥日報,1979年2月8日
- ³⁰「年内にも独立図書館：三戸約二億円で関根地区に」東奥日報,1980年4月2日
- ³¹「図書館建設進む：三戸町」岩手日報,1980年8月9日
- ³²「町立図書館建設めざす：三戸」岩手日報,1979年12月29日
- ³³「待望の町立図書館完成：六戸」デーリー東北,1983年4月29日
- ³⁴「57年度予算拝見：六戸町」デーリー東北,1987年3月26日
- ³⁵「待望の町立図書館完成：六戸」デーリー東北,1983年4月29日
- ³⁶「力合わせ図書館立派に：善意の献本五百冊」東奥日報,1983年6月30日
- ³⁷平賀町誌編さん委員会『平賀町誌：上巻』平賀町,1985,p.1146-1149.
- ³⁸「“お寒い” 図書館設置率：青森県内67市町村で20館」デーリー東北,1990年12月19日
- ³⁹「村民図書館が開館：六ヶ所」1997年7月2日
- ⁴⁰「五戸『歴史みらいパーク』来月オープン」1998年3月26日
- ⁴¹「市立図書館つくって：黒石読書グループが要望」東奥日報,1980年6月9日
「図書館建設実現を：市民の会市長らに要望 黒石」東奥日報,2003年7月30日